

## 教育の現代的課題

### — フロムの遺産の問うていること —

川瀬 八洲夫

(平成 18 年 10 月 5 日受理)

## The Up-to-date Problems of The Education at Present

### — Concerning on Inquiring The Legacy of Erich Fromm —

KAWASE, Yasuo

(Received on October 5, 2006)

キーワード：現代教育，フロムの遺産，人間性，精神作用・意識，新自由主義

Key words: education at present, the legacy of E. Fromm, human character, orientation, neo-liberalism

#### はじめに

いま、教育・学校は、初等教育から高等教育に至るまで重大な岐路に面している。政治・産業・経済・文化など社会のあらゆる分野からのインパクトのもと、教育の組織・制度・内容・方法・学力・評価観などに重大な変革が迫られているのである。わが国の教育は、1960年代後半から量的拡大がめざましく、また'76年、'87年以降度重なる初等、中等教育の教育課程基準の改訂は各学校段階の教育内容の変更を行い、教育の内容、方法、評価などの大幅な改革を試みてきた。しかし、一面こうした改革状況に対応するかの如く、校内暴力・対教師暴力・いじめ・登校拒否（不登校）、ひきこもりなどの諸現象が起り、それらが拡大の一途をたどることになってしまった。

またそのバックグラウンドとしての社会的特質は政治・経済・産業などの分野をはじめ人間活動のあらゆる分野においてグローバル化、自由競争・市場原理、経済至上主義、高度情報化などが支配的である。人々は生きにくい、生活しにくい過度の緊張・ストレスをしいられている。いま、人々・国民は人間として豊かに、安堵の念をもって生きる指針を何に求めることができるのか、社会のあらゆる領域にはびこるモラルハザード、青年を覆っているフリーター・ニート問題、いわゆるキレル子ども

たち、子ども・幼児虐待、そして子ども・青年の逸脱・非行・犯罪・行動問題などの諸課題が渦巻いているのである<sup>1)</sup>。

昨今指摘されている、現代の子ども・青年の教育・学習の疎外形態の状況は

1. 子どもの経験・感覚的基礎の不十分な教育・学習
2. 子ども・学習者の本質的興味・関心からの遊離
3. 教育・学習の制度化・物神化
4. 子どもの「自然」に反する学校
5. 子どもの社会的な生活主体の人格形成不十分な学校
6. 主体破壊としての教育などに示されている<sup>2)</sup>。

こうしたことは 現代が学歴・学校知・偏差値・受験・就職・人材選別等といったことに関わる学校的価値優先になってしまっている、イリイチの (Ivan Illich 「Deschooling Society」) (「脱学校の社会」) でいう学校化社会 (schooled society) といわれる状況になってしまっていることから生起していると考えられよう。イリイチは「脱学校の社会」において、社会と教育の問題を7章に亘って論じているが、その5章「不条理の一貫性」で現代教育の危機は、公的に定められた学習をどんな方法で実施するかというよりも、むしろ個人の学習すべき内容や方法を公が決定できるとする考え方そのものの検討が必要である旨の指摘をし、現代公教育の性格や特質を糾弾していたのである。

さて現代の学校教育の目標を価値教育の視点から論じたクライヴ・ベック (C. Beck) は「Better Schools :

A Values Perspective」(「学校教育の未来」)Iで学校教育を社会・生活・政治・道徳・人間等の関わりから論じ、学校教育の目標を「人間の福祉の増進」と「人間の生活」が基本であることをあげ、教育の目標として 1, 基本的技能の学習と専門的知識 2, 美的発達 3, 道徳的・政治的知識 4, 生活上の知識 5, 精神的発達 6, 社会的参加と発達 7, 学校における平等と社会などをあげている。

これら教育目標の統一的、調和的獲得とその有効な内面化が望まれるが、それらの実現は教育・授業の主體的組織者としての教師の専門的能力や人間的力の如何にかかっている。教師は公教育としての学校教育の最前線に立っている。教師は教育・授業を組織する主体者として国家、社会、親・保護者、子ども・青年などの諸要求を複雑に抱えこみながら教育の実践に取り組まなければならないのである。いまなお教育・学校問題にはあいかわらずのいじめ・不登校、学級崩壊、教師の疲れ・資質・勤労問題などが山積している。教育・学校の非人間化現象が大きくクローズアップされているのである。こうした下での教師の任務一課題は重い。

ところで人間(性)の性格、意識、オリエンテーション、そして人間の破壊、ネクロフィリア、ナルシシズム、権威主義的パーソナリティ問題などに鋭意取り組んで、心理・精神分析・社会学などの研究で注目されて来たフロム(E.Fromm 1900-80)は早くから現代教育の性格についての警鐘を鳴らしていた。彼は、教育はいまや初等教育から高等教育にいたるまで、一つの頂点に達した。ところが教育は向上したのに、理性、判断力、信念は低下している。せいぜい、知性が高まった程度で、理性一個人生活と社会生活の底にあるいろいろな力を理解する能力はますます貧弱になっている。思考がますます感情から分離してしまっていることを指摘していた。そして現代社会の性格をネクロフィリア(支配・破壊・否定性を特徴とする管理型性格)助成の社会的条件が満ちあふれていると断じている。高度に組織化された産業化、官僚的組織化の時代になってしまっているのである。同時に高度な機械・技術・テクノロジーの支配する社会になってしまっているとしてその非人間化状況を糾弾していた<sup>3)</sup>。

## 1,フロムの提起していること

フロムは第二次世界大戦後の激動の世界の多様な文化・

文明・思想・精神などに触れ、人間世界と精神にシリアスな意義申し立てをし続けた。彼は一面、潔癖すぎるほどの倫理性、ヒューマンズム思想を主張・展開していたが、彼はもともとがはラビ(ユダヤ教の注解者・聖職者・律法学者者)、タルムード(ユダヤ教の聖典)学者の家系で生まれ育ち、厳格な探求の精神の持ち主であった。彼はフランクフルトでユダヤ系ドイツ人として生まれ、育ち、18才でフランクフルト大学で法律を学びはじめたが、すぐに大学と専攻を変え、ハイデルベルグ大学に入り、心理学、社会学、哲学を学びはじめたのであった。若きフロムはカール・ヤスパーズ(K.Jaspers)や新カント派の哲学者達、社会学のアルフレド・ウェーバー(A.Weber)、実存哲学のマルティン・ブーバー(M.Buber)など多くの学者からの教えを受けていた。のち、マルクス主義、フロイト理論、そして社会科学研究で世界に知られ、またフランクフルト学派で知られるフランクフルト大学社会研究所でベンヤミン(W.Benjamin)アドルノ(T.W.Adorno)マルクーゼ(H.Marcuse)等と機関誌「社会研究」に依拠しながら活躍していた。後ナチズムとの関係でアメリカ(U.S.A.)に亡命、その後メキシコ、ロカルノ(スイス)で研究・教育・啓蒙的活動をおこなった。

このフロムは宗教思想、ヒューマンズム思想、精神分析、社会心理学、性格学、哲学・人間学等の多様な分野から人間存在、人間性、人間精神、人間そのものに鋭意に多角的に迫ったのであった。彼は人間の生・存在・善と悪・正気の社会の理論形成に取り組み、多様な思想・精神・心理・技術・活動を併せ持ちながら生き、闘い、活躍したのである<sup>4)</sup>。

さてフロムは、教育の目標—人間的成長の目標は、個人を経済的、社会的要請に順応させることではなく、個人の最適度の全人格的完成の要請に従って形成することと主張していた。そしてこのフロムは過去・現在のさまざまな哲学者と哲学、思想の理論においていろいろ対峙してきている。彼はカント(I.Kant)、ヘーゲル(F.Hegel)、ニーチェ(F.W.Nietzsche)、ハーバート・スペンサー(H.Spencer)、ジョン・スチュワート・ミル(J.S.Mill)、ウィリアム・ジェームス(W.James)、ハイデッガー(M.Heidegger)、サルトル(J.P.Sartre)、ブロッホ(E.Bloch)、ハーバーマス(J.Habermas)などの思想を吟味して来たのであった<sup>5)</sup>。

このフロム思想を特徴づける根元的アイデアは、多面的

な思想体験を通して形成されてきたのであるが、バイオフィリア・愛・自律性・生産的方向づけ・善・ヒューマニズム・自由・自律に基づく自己完成、個性に基づく全体への関わり、自己愛に基づく隣人愛などの能力において人間を認識しようという選択においてであった<sup>6)</sup>。

フロム自身は、人間(性)についてあらゆる角度から追究しているが、教育そのものについての直接的言及は多くはない。が、そのなかでも20世紀のきわめて特徴的な教育論であるニール(A.S.Neil)やイリイチ(I.Ilich)に関係し、現代の人間教育の相に触れているのである。ニールの教育論については、ニール教育思想の集大成である「SUMMERHILL a radical approach to child rearing」(「人間育成の基礎」)の序文に、ニール教育思想の評価を載せている。ニールの教育システムは、人間育成の根本問題に立脚している。教育の目的は人生の目的—喜んで働く、幸福を見出す。教育は知性の育成と感情の育成。人生に興味を見出すこととしている。この書は愛・承認・自由等に新しい意味を与えている。ニールは人生と自由に対して断固たる尊敬を持ち、この教育によって子どもは、西欧の人道主義的伝統の目標である理性・愛・誠実・勇気等を身につけるように発達するであろうと指摘しているのである。また先に触れた「脱学校の社会」論のイリイチへの支援、助力もしていたのであった。

さてフロムは、現代社会の病理と人間の<狂気>—<正気>の課題に政治論・社会学・心理学・精神分析的に取り組んでもいた。そのことについて「The Sane Society」(「正気の社会」)で人間の精神の健康についての考えは、人間の本質に関するわれわれの考えによってきまるといい、精神の健康という概念は、人間存在の条件そのものから起こったものであるという。精神の健康は次の点で特徴づけられる。すなわち、愛し、創造する能力、氏族や土地への近親的絆から抜け出すこと、自分自身が自分の力の主体であり、行為者であるという経験から生ずる同一観、われわれの内部の現実と、外部の現実を把握すること、つまり客観性と理性を発達させることであるとして論じていた<sup>7)</sup>。

人間が理性と愛情とを発達させ、人間的なやり方で自然界と社会を経験できてはじめて、気楽になり、自信をとりもどし、人生の支配者になれるとする。人間的な道への自己克服には二つの可能な形式があるという。1.は破壊性は苦悩に導くということ。2.は創造性は幸福に導

くものであることと論じているのである。

かつての偉大な先人たち—オーエン(R.Owen), ブルドン(P.J.Proudhon), トルストイ(A.K.Tolstoi), バクーニン(M.A.Bakunin), デイルケーム(E.Durkheim), マルクス(K.Marx), アインシュタイン(A.Einstein), シュバイツァー(A.Schweitzer)達が語っているのは<人間>であり、現代の産業体制における人間に起こる種々のことについてである。彼らはそれを異なった概念で述べてはいるけれども、すべて、人間が中心的な地位を失い、経済目的のための道具となり、かれの仲間や自然から疎隔されていること。またそれらとの具体的な関係づけを失い、人間がもはや意味ある生活をもたなくなってしまうことに気づいていることである。人間が自己感覚を失い、他人から認められることに頼るようになったため、ひとと同調する傾向を持ち、しかも不安定を感じていること。また不満足で、退屈で、しかも不安で、エネルギーの大部分をこの不安を償うなったり、包み隠すという試みに費やしている。人間の知能は、優れているが、理性は退化している。しかも、自己の技術力からみて、人間は、文明の存在と、人類の存在すら憂慮すべきほど危険ならしめていると、指摘していた<sup>8)</sup>。こうしたフロムの多分野における活動については、学問的評価、啓蒙的評価、大衆的ジャーナリスト的な評価などいろいろなレベルからの毀誉褒貶さまざまであった。しかし社会学・心理学・精神分析学・実存主義・マルクス主義・宗教・社会的性格などに関わって展開されるヒューマニズム思想、そして臨床的活動は、それぞれの分野に関わり合いながらも、世界に多くの影響、遺産を残していた。こと人間—存在・性格・精神・意識・行動などに係る分析、その思想は注目されてきた。なかんずく人間の条件についてはあらゆる生物的条件、社会的条件、文化的条件などから正・負の両面から明晰な分析を試みていたのであった。フロム思想で特に注目される彼の活動の中期—1950年を挟む10～15年—に論述された「Escape from Freedom」(「自由からの逃走」)、「The Sane Society」(「正気の社会」)、「The Art of Loving」(「愛すること」)など、またその後半—1960年以降での「The Anatomy of Human Life」(「破壊」)や「To Have or To Be」(「生きるということ」)、「The Dogma of Christ」(「革命的人間」)、「The Art of Being」(「よりよく生きるということ」)、「On Disobedience and Other Essays」(「反抗と自由」)などで、画期的な問題提起の思想、哲学

が発表されていた。中期の主たるテーマは 実存哲学、スピノザ・マルクス・旧約聖書・禅思想などから発展するヒューマニズム思想、またそれらに裏付けられた哲学的人間学が主流であった。後半に取り組んだ思想は、生と死の見直しの強化—エコロジー論など—人間の生、より人間的・善に生きるということ、また野生に回帰の破壊性などが取り上げられていたのであった<sup>9)</sup>。

さて教育は人間形成の機能・役割であるが、教育の理論は、トータルな観点からの—人間学であるといえよう。フロムの研究の視点は、人間・文化・社会・国家などのあらゆる視点から、またあらゆる正・負の相—平和・戦争、闘い・共生、愛・憎しみ、生産・破壊、善・悪、独立・依存、否定・肯定、やさしさ・いたぶり—などから分析・哲学・思想していたのであった。このことは20世紀の人種・民族・人間の集团的、かつ個別的観点から—また世界史、文化史、人類史的視点から人間という存在、人間の生き方をシリアスに分析・描写したのである。われわれはフロムのなした、20世紀の悲劇、破壊についてのこれらの分析から何を見出し、引き出し、学び得るか？人間のもつ悪の業にどう対処しうるのか？このことは、シリアスな避けられない課題なのである。このフロムは、研究—人間の考察を多面的に展開しているが、宗教・倫理・精神分析の面から「Escape from Freedom」(「自由からの逃走」)、「Man for Himself」(「人間における自由」)、「Psychoanalysis and Religion」(「心理分析と宗教」)などで人間性の何たるかを追究する。また人間性における悪や破壊について「The Heart of Man」(「悪について」)、「人間における自由」「破壊」などで人間の有する人間(性)の怖るべき性質の分析がなされているのである。社会構造、政治思想などとの関連からは、人間の狂気(正気)の問題を社会心理学的な分析を通して「正気の社会」「自由からの逃走」などで鋭意に分析しているのである。

人間性と人間的体験、よりよく生きるということの思想や哲学、心理などについてその具体的要件・性格などを「生きるということ」「愛するということ」「The Revolution of Hope」(「希望の革命」)、「Beyond the Chain's of Illusion」(「疑惑と行動」)「革命の人間」「よりよく生きるということ」などで明快に分析、叙述しているのである。

フロムは人間存在の根本的、基本的な在り方において、「持つこと」(to have)の存在、「あること」(to be)の

存在様式を措定している。人間の生き方においては経験的、人類学的、精神分析的データーからその存在・生き方の特質については、「持つこと」の生き方は時間に縛られ、物に縛られ、過去・現在・未来に縛られる。蓄積した金銭・土地・地位・知識・記憶にこだわり、執着する。「あること」の存在は一いま此処に存在する。いま、まさに生起するこの過程に存在する。縛られない、創造、生産、愛、喜びに執着する心的能力なのである。そして、先の「生きるということ」の延長・補充・発展として生きること、存在のしかたのために具体的な方法論—精神分析的、セラピーを超えてよりよく生きる(well-being)のためのメトデ論として「よりよく生きること」(「The Art of Being」)を提言したのであった。人間が望ましく、理想的な「生」あるためには「あること」の存在の必要性を主張しているのである<sup>10)</sup>。

## 2. 教育の現代的課題—フロムの遺産の問うていること

人間(性)教育への問い—現代の子ども・青年は現実社会の様々な性格を有している家庭・学校・地域・社会のなかで態度し、行動し、いろいろな意識を持っている。彼らは、そのかなりの部分において、いじめ・不登校・ひきこもりといった学校、教育に直接関わることからの疎外に遭遇し、また非行、逸脱行動、犯罪の多発性に見るような社会的問題・課題として対処していかなければならないのである。AD、ADHD、学級崩壊、学校崩壊といった医療・心理・教育など方法上のシリアスな課題を持ち、また彼らに適切な仲間・人間集団がない。そして自律(自立)、共同体感覚、責任感、適切な人間関係の不成立、コミュニケーション不足などの社会化の立ち遅れ、そして個人としての自由・放任、孤立・孤独といった性格形成上のネック。こうした多様で複雑な諸課題に見舞われている現況にある。こうしたことに関係しつつ学校教育に多くの影響を与える教育課程審議会は、その答申(平成10年7月)で、これらに関わる諸課題を提起していた。

答申の骨格・内容は 1、豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること 2、自ら学び、自ら考える力を育成すること 3、ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること 4、各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めることなどである。しかしこうした社会の変革と

教育、学校の改変のなかであって、なお 対応できない教育・学校問題が山積している。それらは学級崩壊、学校崩壊、不登校、いじめ、とじこもり、非行、逸脱、犯罪、また 教師の不登校などである。このような諸問題に如何に、どのような方法で対応し解決を求め、態度し、行動するか。その解決のための質的、量的実践が求められている。これらの状況を作り上げてきた基本的要因には 1、家庭や社会の変容に伴う体験や交流機会の不足 2、大人社会の風潮や社会全体の価値観の揺らぎ 3、情報化の進展や有害情報との接触 などが指摘されているのである。

ところで人間性教育の現代的課題としていろいろな視点からの分析が必要であるが、現代の人間形成の重要な発達課題として、子ども・青年の適切な人間的な成長・発達、とりわけ健康なパーソナリティーの形成と社会化(socialization)が望まれている状況にある。

さて多様な社会・文化・民族・人種に触れ、社会学、心理学、精神分析などを通して多面的に人間研究を進めてきた、先にあげたフロム(E.Fromm)は、多くの著作のなかで、「人間とは何者か?」(Who is man?)を問うている。生物的起源から来る人間性、人間性の普遍的性格、社会的・文化的条件としての人間性、人間を動機づける情熱、そして人間の理性、人間的感情などといった諸概念を整理しつつ人間性の何たるかを考察していた。このフロムは人間(性)のオリエンテーション(orientation, 自己と現在の環境及び過去との関係を認識する精神作用)を次の三形態に分類している。

- 1、ネクロフィリア(否定と破壊性の意識と行動一対するはバイオフィリア=生・生産性・愛の意識と行動)
- 2、ナルシズム(自己愛の意識と行動一対するは合理的・客観的意識と行動)
- 3、共生的・近親相姦的固着(母なるものあるいはそれと等価値のものへの傾斜の意識と行動一対するは成長・自由・独立の意識と行動)

これら三つの悪性形態としてのネクロフィリア、ナルシズム、共生的・近親相姦的固着等のオリエンテーションの結合は人間性の悪性形態としての最悪の「衰退の症候群」を形成することになる。こうした悪性形態の意識の膚(とりこ)にならないためには悪性のオリエンテーションのそれぞれの意識と行動に、相対するバイオフィリア、合理性・客観性の意識、自由と独立性の意識等の

成長の過程に触れ、参加することが必要なのである。そしてなによりも、子どもの生育・成長の過程に「人間的体験」の強化、その教育が望まれるのである。

それではこの人間的体験の意味することは何であろうか。現代は自由な市場原理、高度情報化社会、自由な競争を基本的ベースにした産業社会で、管理・否定・破壊の性格の色濃いネクロフィリア助成の社会である。こうした社会形態では、いきおいナルシスティックで、自己本位の欲求追求型の性格形成の傾向が強くなる。またフロムの「希望の革命」で指摘されるように、現代社会では人間の知的、技術的発達はまた限度を知らないほどである。それと同時に動物と共通な 感覚や感情的体験(性欲、攻撃、恐怖、飢えなど)をも強めている傾向にある。こうしたなかで知的なものではなく、また動物的な感覚や感情的体験でもなく人間だけの持つ独特な感情—<人間的体験>—がある。それは、直接的な生存の機能に関わらない諸感情であって、<おもいやり><食欲><関心><責任><自由><希望><信念><勇気><愛>などがそれに当たる。こうした人間の諸感情は、人間を否定、破壊性などの悪性形態の意識、行動から解放し 人間の共存・共生への世界に誘う(いざなう)高貴さ、美しさの基本を形成することにつながっていくものである。フロムは人間存在、実存、愛、その倫理性、自由、善と悪などを実践哲学として論じる。そして善と悪(あらゆる意味で人間的・愛・生産性の「善」に対して、「悪」=退行—非人間的領域、生に逆行の性格)、望ましい存在論=「あること—to be」—創造・生産・愛・喜び・能動的生産的活動性、理性と能力と心理学的問題としての自由の問題を論じている<sup>11)</sup>。

また哲学・心理学・カウンセリング理論の研究者で人間研究や個人の人格統合論を思想したヒューマニスティック・サイコジストのメイ(R.May)は人間個人の内的統合とその理想的資質である自由・責任・勇気・愛・内面的誠実の形成を人間性の究極的理想であるとして分析している。

現代における人間教育の基本的課題は現代社会の構造的特質である—先にふれた諸問題に埋没することなく、人間(性)の本質であろうとする人間的体験を基本的原理に据えた教育の再構築が望まれている。

## むすびに

現代の子ども・青年はその興味・関心の多くが私的領

域に集中し、社会性、公共性が希薄になってしまっている。そして子ども・青年の性格・意識・行動等においては、これまでに触れてきたように多種多様な問題・課題を抱えている。昨今の 家庭・学校・地域等における子ども・青年達の各種の行動問題・逸脱・非行・犯罪等には目を覆うものがある。しかし明らかなことは 彼一彼女らの性格・意識・態度・行動等は、自己の発達・人間形成の基盤である社会、家庭、人間全体の構造的特質に正・負の影響を決定的に受けているということである。

現代社会の生産・産業・経済・文化・教育そしてこれらを意味づけ、価値づけている支配的な意識・行動・価値観—これらの背後にあるイデオロギー的バックグラウンドとしての新自由主義思想は、グローバル化を背景に経済至上主義・自由競争・規制緩和・市場原理・物的利益主義。そしてこのための統治・支配・管理の構造等々を特徴づけている。これらのことが教育—学校の世界—教育内容・学校選択・評価システム・教育費配分等にも大きくのしかかっているのである。これらが結果的に各種の格差拡大を助長している。教育—学校もこのような体制下に巻きこまれている。また昨今、急速に展開されている狭隘な国家的・歴史的ナショナリズムの台頭は、良き民主・人権を支える 共同(協同)・共生・共存・共同体意識を急速に失速させ、また金銭・物・競争を超えた精神的価値—愛・誠実・配慮・正義(公正)そして人間の尊厳性・個性・人権・友愛・平等などをうわべのお題目的命題にすぎなくしてしまっている。こうしたことが非人間化状況を増幅させ、人々の不信・差別・モラルハザードなどを生み出す温床をつくり出しているのである。教育—学校を、そして社会的価値観として、人間・人権・尊厳・協同・共生・連帯などの意識形成を進める本質的な教育の場に組み直すことがますます必要になり、求められている。いま、シリアスな変革の状況にあるというべきであろう。

## 注

- 1) 日本子ども家庭総合研究所「日本子ども資料年鑑」2005, 2006年 KTC出版
- 2) 講座学校「学校とはなにか」2章 柏書房
- 3) E., Fromm : On Disobedience and Other Essays. (「反抗と自由」) chap. IV N.Y Seabury Press 1981 : The Heart of Man (「悪について」) Chap.

IV N.Y Harper & Row 1964

- 4) P.Funk:Erich Fromm: 佐野哲朗 佐野五郎訳「エーリッヒ・フロム—人と思想」紀伊国屋書店 60—61頁  
D.Burston:The Legacy of Erich Fromm: (「フロムの遺産」) Chap11 U.S.A Harvard University Press
- 5) 同4
- 6) P.Funk:Erich Fromm: 佐野哲朗 佐野五郎訳「エーリッヒ・フロム—人と思想」紀伊国屋書店 49頁
- 7) E.Fromm: The Sane Society: Reinhart and Winston (「正気の社会」) ChapIV 1955
- 8) ibid: Chap VIII
- 9) D.Burston: The Legacy of Erich Fromm: (「フロムの遺産」) Chap11 U.S.A Harvard University Press 10 G.P.Knapp: The Art of Living—Erich Fromm's Life and Works: (「評伝エーリッヒ・フロム」) Chap.VIII, IX Verlag Peter Lang AG 1989
- 11) 水田信「実存と愛」創信社 第3章 第5章: The Heart of Man (「悪について」) Chap.IV N.Y Harper & Row 1964

## 参考文献

- 1) E.Fromm: Escape from Freedom: Farrar and Rinehart 1941 (「自由からの逃走」)
- 2) E.Fromm: Man for Himself: Reinhart and Comp 1947 (「人間における自由」)
- 3) E.Fromm: The anatomy of Human Destructiveness: 1973 (「破壊」)
- 4) E.Fromm: To Have To Be?: Harper and Row 976 (「生きるということ」)
- 5) I. Illich: Deschooling Society: Harper and Row: 1970 (「脱学校の社会」)
- 6) C.Beck.: Better School, A Values Perspective: 邦訳 山根耕平「学校教育の未来」玉川大学出版部 1990
- 7) E.Fromm: The Dogma of Christ: Holt, Rinehart and Winston Inc.: 「革命的人間」1963
- 8) E.Fromm: The Revolutin of Hope: N,Y Harper & Row 「希望の革命」1974

9) E,Fromm: For The Love of Life: N,Y Macmillan

Inc. 「人生の愛のために」 1986

その他

### Summary

This is the paper that the author was discussing and wrote on the up-to-date problems of the education at present concerning on E,Fromm's thought. So many children and youngmen in Japan at present are suffering from serious stress of school studies, human relation and so many crisis around their daily life. The author is discussing and learned on E,Fromm's thought and theory on a view of human character, orientation of human being, the art of being, humanism thought, the art of loving, the revolution of hope and etc.

The author discussed of the up-to-date problems of the education at present and tried to write the way how to reconstruct the school-educational system, educational contents and all around the stress, crisis of the children, youth and their mind at present.